

研究ノート カムリの国の地名研究：落穂拾い（その3）

第2枝：地名パンディ *Pandy* -1-

水谷 宏

Lloffion: Astudiaethau Enwau Lleoedd yng Nghymru (3)

Yr Ail Gainc

Hiroshi Mizutani

承前

### 1. *Pandy* の地名に生きるカムリの国の伝統社会

本研究ノート第1枝「2. *Llan* で始まる地名」(本誌第2巻第1号37-39頁)で紹介したように、水名学的地名の *Afon*「川」、*Nant*「小川」、*Llyn*「湖」、*Cwm*「(狭い)谷」、*Dyffryn*「(広い)谷」、*Mynydd*「山」、*Aber*「河口」、*Bryn*「丘」、*Pont*「橋」、*Cefn*「(山の)背、尾根」といった、自然に関する地名の数が、第1位の *Llan*「教会」で始まる地名に次いで、上位10位を占めていて、豊かな自然のカムリの国が地名からも理解できるのである。本稿が取り上げる *Pandy* (以下、この語が地名として用いられる場合には **太字の斜字体** で表記し、「縮絨小屋、縮絨場、縮絨工場」を意味する普通名詞の場合には、pandy と小文字で表記) という地名は、さしずめ、「自然と人工」の合作というカムリの国の伝統文化をわれわれに伝えてくれているのである。本誌第2巻第1号37-38 ページで紹介した Elwyn Davies (1975) *Rhestr o Enwau Lleoedd / A Gazetteer of Welsh Place-names* (以下、*Rh.E.Ll.*) には、以下の9箇所 (*Pandy* が単独で用いられてる地名が5箇所と、*Pandy'r Capel*, *Pandytudur* のように後に他の名詞が続くもの2箇所、そして *Nant y Pandy*, *Tonypandy* のように、複合語の二番目の要素に *Pandy* が用いられているものが2箇所) が収録されているだけであり、数は多くはない。これには、同書の Rhagymadrodd「序文」に以下のような同書の目的が述べられている。

‘... , prif bwrpas y rhestr yw dangos sut y dylid sgrifennu enwau lleoedd Cymraeg, a pheth ychwanegol yw unrhyw ddefnyddioldeb a all fod iddi fel geiriadur daearyddol. Gan hynny, nid yw'r rhestr yn un gyflawn, ond eto ceisiwyd cynnwys ynddi enwau Cymraeg pob tref a phlwyf, a'r prif nodweddiad daearyddol, pentrefi, gorsaf oedd y rheilffyrdd, a llythyrdai; ni chynhwyswyd enwau ffermydd onid oes iddynt ryw ddiddordeb hanesyddol neu lenyddol.’ t. xi.

‘... , the primary purpose of the list is to serve as a guide to the orthography of Welsh place-names; any usefulness it may have as

a gazetteer is a secondary matter. For this reason the list is not exhaustive, although an attempt has been made to include the Welsh names of all towns and parishes and the chief natural features, villages, railway stations, and post offices; farm names are usually given only if they have some historical, biographical, or literary interest.' (p. xxi.)

従って、同書が準拠した *Ordnance Survey* の '*one-inch map*' と呼ばれている地図の第 6 版に掲載されているすべての地名 (*Pandy* を含め) が列挙されているとは限らない。同書に含まれている *Pandy* の地名 9 箇所は以下の通りである。

即ち (州名は 1974 年以前のもので、*p.* = *pentref* 「村」、*ardal* = 「地域」 'locality, neighbourhood'、*t.* = *tref* 「町」)、

#### ***Pandy***

- 1) マヌイ州 クリコルナイ・ヴァウル教区の村 *p.*, Crucornau Fawr, Mynwy. 32/3322
- 2) メイリオネーズ州 トウイン教区の村 *p.*, Towyn, Meirionydd. 23/6203
- 3) トゥレヴァルドゥイン州 サンブリン・マイル教区の地域 *ardal*. Llanbryn-mair, Trefaldwyn. 23/9004
- 4) ディンビーヒ州 サンサンフライド・グリーン・ケイリョーグ教区の地域 *ardal*. Llansanffraid Glyn Ceiriog, Dinbych. 33/1936
- 5) メイリオネーズ州 サンイウフシーン教区の地域 *ardal*., Llanuwchllyn, Meirionydd. 23/8729

***Pandy'r Capel***, メイリオネーズ州 グイゼルウェルン教区の村 *p.* Gwyddelwern, Meirionydd. 33/0850

***Pandytudur***, ディンビーヒ州 サンゲルニウ教区の村 *p.* Llangernyw, Dinbych. 23/8564

***Nant y Pandy***, メイリオネーズ州 コルウェン教区の 1 地点 Corwen, Meirionydd. 33/1441

***Tonypandy***, モルガヌーグ州 フロンザ教区の町 *t.*, Rhondda, Morgannwg. 21/9992

## 2. 観光旅行者向き地図 *Wales Tourist Map* 上の位置

上記 9 箇所の地名は、*Pandy* 5) と *Nant y Pandy* とを除いて、現地で簡単に入手できる観光旅行者向きの地図、*Wales Tourist Map* (Norwich: Jarrold Publishing 出版、カムリ観光局 Bwrdd Croeso Cymru / Wales Tourist Board

発行、Cardiff, 1993, 1995, 以下、*WTM1993, 1995*)にも収録されている。そして、*Pandy 1*)と *Tonypandy* 以外は、すべて北部カムリにある。—ごく大雑把な南北カムリの境界は、中部西海岸の町アベラストゥイス *Aberystwyth* (22/5881)と中東部のイングランドとの国境の町、トゥレヴァクロ *Trefyclo* (またはトゥレーヴ・ア・クラウズ *Tref-y-Clawdd* (32/2872)で、英名は *Knighton*、サンドゥリンドッド *Llandrindod / Llandrindod Wells* (32/0561)の少し東にある A44 号線上の村、ペナボント *Penybont* (32/1164)と、イングランドのシュロウズベリ *Shrewsbury* とを結ぶ A488 号線上にある)とを結ぶ線である—

本誌第 2 巻第 1 号 38 ページで紹介した、「カムリ及び西部イングランド英国陸地測量部地図距離座標系 (100 平方キロメートル)」 *Sgwarion mawrion* (*gyda ochrau o 100 km*) *y Grid Prydeinig dros Gymru a gorllewin Lloegr / National Grid on Wales and western England (100 km. sq.)* (以下、「座標」)では、カムリ全域は 12/-, 21/-, 22/-, 23/-, 31/-, 32/-, 33/- の 7 つの「柁(100 キロメートル四方)」に及んでいるが、主要部分 (特に、本稿との関係での) は、22/-, 23/-, 32/-, 33/- の 4 つの柁であり、それぞれ、北西部 (23/-)、北東部 (33/-)、南西部 (22/-)、南東部 (32/-) が当てはまる。*WTM1993, 1995* の他、いくつかの地図 (後述) の助けを借りて説明すると以下のようになる。

まず、*Pandy 1*) は、*Pandy* だけの地名のうちでは唯一つ南東部 (32/-) 内に位置していて、*WTM1993, 1995* では、ア・ヴェニ *Y Fenni / Abergavenny* (以下、/ の後は英名) と、イングランドの町ヘリファド *Hereford* とを結ぶ A465 号線上にある。ア・ヴェニから約 10 キロほど北に行ったところで、ほぼ、イングランドとの国境に近い地点である。ア・ヴェニの地点が 32/2914 であり、*Pandy 1*) の地点が 32/3322 であるから、ア・ヴェニからは東へ 4 キロ、北へ 8 キロの地点ということになる。この村の西側には、グイ川 (英語名ワイ川) *Afon Gwy / Wye* の支流の一つであるマヌイ川 *Afon Mynwy* の支流の一つであるホンジー川 *Afon Honndu* が流れている。

次いで、*Pandy 2*) は、23/6203 の地点であるから、北西部 (23/-) であり、トウイン *Towyn* (23/5800) (*Rh.E.LI*:110 では、*Tywyn*—*タウイン*の綴りも) の町から、マハンセス *Machynlleth* (23/7400) とドルゲセ *Dolgellau* (23/7217) とを結ぶ A487 号線上のミンフォルズ *Minffordd / Minford* (23/5938) とを結ぶ B4405 号線から田舎道を東へ 2 キロ足らず逸れたところにある。近くには、1877 年、アベルガノルwyn *Abergynolwyn* (23/6706) の採石場から (この鉄道の駅の地点は 23/6806 で、採石場から南東へ約 1 キロのところ) に位置している) トウインの港まで、スレートを運ぶために敷かれた鉄道で、1947 年の採石場の閉鎖後は、ボランティア保存団体が運営しているタラシン鉄道

Talyllyn Railway が走っている (John Tomes, 1995, *Blue Guide Wales*, p. 164 参照)。この村の南東 3 キロばかりにある標高約 535 メートルのトゥリム・ゲシ山 Trum Gelli (23/6401) に源流をもつ小川 (ダサニ川 Afon Dysynni の支流で - *WTM1993, 1995* その他の地図にもこの支流の名前はない) が、村のすぐそばを流れ、ダサニ川に合流した後、ケレディギオン湾へと注いでいる。

*Pandy* 3) の地点 23/9004 は、*WTM1993, 1995* では、上記の Tywyn (23/5800) のほぼ真東へ直線で 15 キロほどのところにあるマハンセス Machynlleth (23/7400) から、ダヴィ渓谷 Dyffryn Dyfi / Dovey Valley に沿って北東に走る A489 号線を 10 キロほどの地点、グラントウイミン村 Glantwymyn (23/8204) (*CRA1997:37* による地名で、*WTM1993, 1995* その他の地図ではケマイス・ロード Cemmaes Road となっている) のラウンダバウト roundabout で右折して東に向う A470 号線上にある村サンプリンマイル Llanbrynmair (23/8730) を左折し、南から来る B4518 号線が横切って北上する田舎道を 2~3 キロ進んだところにある。クレガマント川 Afon Clegymant またはクント川 Afon Cwnt (*WTM1993, 1995* では前者、Cyhoeddiadau Stad 出版 (年代不詳) の *Cymru, Map yn y Gymraeg* 「カムライグ語地図」(以下、*CMG n.d.*) では後者の河川名が掲載されていて、いずれが正しいのかは調査中) が近くを流れている。

*Pandy* 4) 33/1936 は、33/- の地域、即ち、北東部カムリにある。この村は、レクサム Wreccsam / Wrexham (33/3350) から A483 号線を南下し、ほぼ真南約 13 キロのところ、イングランドとの国境に近いア・ワイン村 Y Waun / Chirk (33/2937) から西へケイリオグ川 Ceiriog にほぼ平行して走る B4500 号線が、グリーンケイリオグ村 Glynceiriog (サンサンフライズ・グリーンケイリオグ Llansanffraidd Glynceiriog) (33/2038) で 90 度に左折して南下し、さらに 2~3 キロ行ったところにある。ケイリオグ渓谷 Dyffryn Ceiriog / Vale of Ceirog のほぼ真ん中に位置していて、ケイリオグ川 Afon Ceiriog の支流テイルー川 Afon Teirw がケイリオグ川に注ぐ河口 aber 近くに位置している。

*Pandy* 5) の地点は 23/8729 であるが、*WTM1993, 1995* にはこの *Pandy* の地名は載っていない。「メイリオニーズ州 サンイウフシーンの地域」という *Rh.E.Ll* :91) の記述では、サンイウフシーン村 Llanuwchllyn (23/8730) の 1 キロ南の地点である。村はずれ辺りであり、サンイウフシーン村の北側に流れるシウ川 Lliw の注ぐ支流で、ヴォイル・フリーズに源流を持つクーム・カンズイド川 Afon Cwm Cynllwyd が B4403 号線を横切る辺りにある。サンイウフシーン村は、ドルゲセ Dolgellau (23/7217) と、ア・バラ Y Bala (23/9236) とを結ぶ A494 号線上、バラ湖 (シーン・テギッド Llyn Tegid 23/9032 は、南

西端 23/8931~北東端 23/9235 にかけて斜めに位置している)の南端のすぐ近くで、B4403 号線に入ったすぐのところにある。なお、*AA Big Road Atlas Britain 1996* (以下、*AABRA1996*) のシート 45 には、*Pandy* の地名が掲載されている。

*Pandy'r Capel* (直訳すると「チャペルのパンディ」) 33/0850 は、*Pandy* 4) と同じ、北東部カムリにある。前述のア・ワイン Y Waun / Chirk から、B4500 号線ではなく、北西部のバンゴール Bangor (23/5872) に向う A5 号線を、風光明媚なサンゴセン溪谷 Dyffryn Llangollen / Vale of Llangollen に向かい、「国際音楽祭」(毎年7月開催) で有名な町サンゴセン Llangollen (33/2142) を通過して、さらに西に進むと、コルウェン村 Corwen (33/0743) に出る。さらに2~3キロ西へ進むとフリシン Rhuthun / Ruthin (33/1258) に向う A494 号線を右折して北上すると、右折地点とフリシンの町とのほぼ中間点の手前で、右折地点からは10数キロ行ったところ、ケヴン・コーホ農園 Cefn Coch (33/1457) に向う B5429 号線に入るすぐ手前があるのが *Pandy'r Capel* の村である。クルーイッド川 Afon Clwyd の上流がそばを流れている。

パンディティディル *Pandytudur* (23/8564) は、直訳すると、「ティディルさん(英語ではチューダーさん Tudor)のパンディ」であるが、23/ の地域、北西部にある。北海岸の観光地域下町コンウイ Conwy (23/7877) から、風光明媚の観光地ベトウス・ア・コイド Betws-y-Coed (23/7956) へと南に延びるコンウイ溪谷 Dyffryn Conwy / Vale of Conwy の上流、A470 号線上に位置するサンルスト Llanrwst (23/7961) から北東に進み、サンヴァイル・タルハエアールン Llanfair Talhaearn (23/9270) の小村に通じる A548 号線を、5キロ余り進むと、グイセリン村 Gwytherin (23/8761) に向う B5384 号線へと右折する。そこからは、2~3キロのところ、*Pandytudur* の村があり、デルヴィン川 Derfyn がガセン川 Gallen に変わる辺りで、村を通り抜けて流れている。

*Nant y Pandy* (33/1441) は、*WTM1993, 1995* その他の地図にも出ていないが、*Pandy'r Capel* の説明で言及した、ア・ワイン Y Waun / Chirk から北西部のバンゴールに向う A5 号線上、サンゴセン町とコルウェン町の間にあるグリンドヴルドウイ村 Glyndyfrdwy (33/1542) の真南にある。*WTM1993, 1995* では、モイル・フェルナ山 Moel Fferna (2071 ft./ 631 m.) を源流とする小川が Glyndyfrdwy に向かって北上して流れている川沿いで、ダヴルドウイ川 Afon Dyfrdwy / Dee に注ぐ河口 aber (33/1543) の南約2キロの地点である。Nant は「小川」の意であり、カムライグ語の属格表現は主要部に後置される(本誌第3巻第1号に掲載されている小池剛史氏の論文、「カムライグ語の属格: 構造・機能・関係」14-34 ページ参照)ので、全体の意味としては「縮

絨小屋の小川」となる。従って、厳密に言えば、*Pandy* の地名というよりも、*pandy* の語を含む「小川」の地名ということになる。そもそも、*pandy* が小川を「所有」するはずはなく、むしろ、水車で小川の水を利用して、縮絨作業を営んでいるのである。「縮絨小屋の(ある)小川」という地名と考えることも可能である。

同様のことが、*Tonypandy* (21/9992) にも言えるのであり、*ton* 「草地」が主要部で、全体は「縮絨小屋の(ある)草地」の地名と考える。*Tonypandy* は「町」であり、*WTM1993, 1995* その他の地図にも掲載されている。首都のカイルディーズ市 *Caerdydd* (31/2175) から、サンダーヴ *Llandaf* (31/1578) を通り、北西の方向に向う *A4119* 号線が、エライ溪谷 *Dyffryn Elái / Ely Valley* を通過して、フロンザ溪谷 *Dyffryn Rhondda / Rhondda Valley* に向い、*A4088* 号線に出会うすぐ手前に位置している。映画「我が谷は緑なりき」で有名になったア・ギルヴァーハ・ゴホ村 *Y Gilfach-Goch* (21/9889) の真北、直線で約3キロのところのところに位置している。

因みに、現地調査をその一部に取り入れている筆者の「カムリ学研究」は、1968年に英国大使館給費生として北部カムリのバンゴールにある北カムリ大学 *Coleg Prifysgol Godledd Cymru* (当時の名称) に滞在していたときに始まった。大別して、1) 各地の方言の調査研究、2) 地名の調査研究、3) オガム文字を含む碑文の調査研究、から成っていて、その後、幾たびかの現地訪問の機会を利用して実施してきた。パンディティディルの村は、筆者自身が、1993年度にカムリ全域にわたって実施した方言の現地調査をした村々のうちのひとつである。美しい静かな佇まいの村であり、当時はさほど人口の過疎化が進行していたとは思えなかったし、かなり豊かな村であったと観察していた。今も変わらず、当時のままであってほしいと願っている。

その他の調査地点としての *Pandy* 1) から 5) までと、*Pandy'r Capel* については、残念ながら、現地滞在の主目的が方言の現地調査であったため、方言調査に出かける往路・復路に2~3度通りかかった程度である。ただ、サンイウフシーン村のある *A494* 号線は、方言調査で何度も通っていて、その都度、気にはかけつつも、*Pandy* 5) の地点には立ち寄る機会を逸していたのであった。しかし、*B4403* 号線上の村、サンガウエル *Llangawer* (23/9032) での方言調査(1993年度)の帰路、この地点は確認していた。研究期間がせめてもう1~2か月延長できていたならば、「パンディ研究」の現地調査部分の10分の一乃至は20分の一程度は実施していたかも知れない。上記のように、*WTM1993, 1995* には全部で9箇所しか掲載されていないが、実は、*Pandy* 1) 語の地名だけでも、カムリの国全域では131箇所にも上るといふ事情があり、方言調査の片

手間では到底不十分だと判断し、敢えて手を付けないままに先送りをしたのだった。それ以外に *Pandy* の語の前後に他の名詞（人名、地名、土地利用名）や形容詞が用いられている地名、例えば、*Cae Pandy*, *Cefn Pandy*, *Pandy'r Capel*, *Pandy Aberbechan*, さらには、'melin ban' 「縮絨水車場」その他の名称が用いられる地点を加えると、330 地点以上にまで及ぶという事情も加味した（次の段落を参照）。こうした地点を、全地点でなくても、その大部分を訪れて、何らかの詳しい調査を実施するためには、最低でも1年間の研修期間が必要だと判断したからであった。

*WTM1993*, *1995* を含め、地図上には現われない *Pandy* その他の縮絨水車場のカムリ全域の分布の状況は以下の通りである。1) モーン州 Môn 22, 2) カイルナルヴォン州 Caernarfon 33, 3) ディンビーヒ州 Dinbych 31, 4) フリント州 Flint 10, 5) メイリオニーズ州 Meirionydd 63, 6) トウレヴァルドウィン州 Trefaldwy 34, 7) ケレディギオン州 Ceredigion 25, 8) マイスアヴェッド州 Maesyfed 7, 9) ペンヴロ州 Penfro 14, 10) カイルヴァルジン州 Caerfyrddin 32, 11) ブラヘイニオグ州 Brycheiniog 13, 12) モルガヌーグ州 Morgannwg 28, そして 13) マヌイ州 Mynwy 21, 合計 333 地点。（J. Geraint Jenkins (1969) *The Welsh Woollen Industry*, Cardiff: National Museum of Wales, Welsh Folk Museum, p. 103, Fig. 12 Distribution of the Place Name Pandy in Wales による）。

一方では、そのような筆者自身の身勝手な言い訳にもかかわらず、*Pandy* の地名がカムリのほぼ全域にくまなく分布している状態である以上、方言調査や碑文の調査のために訪れた地点が、*Pandy* の地名の地点と重複していることはしばしばであった。従って、地図上には掲載されてはいなくとも、*Pandy* の地名が、北カムリ大学やアベラストゥイスにある国立カムリ図書館 Llyfrgell Genedlaethol Cymru, Aberystwyth に保存されている諸種の文献資料や記録に残っていることが確認され、現地の先行研究、特に、Melville Richards (1969) 'Welsh Place and Personal Names connected with the Woollen Industry' *Appendix 1*, in J. Geraint Jenkins (1969), pp. 351-372. に収録されている地点のすぐ近くにある行政教区 plwyf/civil parish を訪れていたことになり、そうした地点への訪問は、上記の J. Geraint Jenkins (1969) の地図に示されている 333 地点の約 80% ほどへ、何らかの機会に訪れていたことになるのである。

なお、本研究ノートで参照している地図は、以下のものであり、いずれも、方言調査に際して、調査地点を見つけるための道路地図として利用したものである。既に言及した *WTM1993*, *1995*, *CMG n.d.*, *CRA1997*, *AABRA1996* の

他、次のものである。

- 1) *Ordnance Survey Motoring Atlas of Great Britain, 1985*, (以下、*OSMA1985*)
- 2) *Ordnance Survey Motoring Atlas of Great Britain, 1989*, (以下、*OSMA1989*)
- 3) *Ordnance Survey Motoring Atlas of Great Britain, 1993*, (以下、*OSMA1993*)
- 4) *Ordnance Survey Road Atlas 2000 Britain* (以下、*OSRA2000*)

以上の8種類の地図での *Rh.E.Ll.* に含まれている9箇所の *Pandy* の地名の掲載の有無は、以下の通りである。(○=掲載「有」、×=掲載「無し」)

地図名	Pandy	1)	2)	3)	4)	5)	P. C.	Ptudur	N. P.	T. P.
<i>WTM1993/1995</i>	○	○	○	○	○	×	○	○	×	○
<i>CMG n.d.</i>	○	○	×	○	×	×	×	○	×	○
<i>OSMA1985</i>	○	×	○	○	×	×	×	○	×	○
<i>OSMA1989</i>	○	×	○	○	×	×	×	○	×	○
<i>OSMA1993</i>	○	×	○	○	×	×	×	○	×	○
<i>OSRA2000</i>	○	×	○	○	×	×	×	○	×	○
<i>AABRA1996</i>	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○
<i>CRA1997</i>	○	○	○	○	×	×	×	○	×	○

### 3. *Pandy* とはどんなところか

パンディの地名をもつ上記の9箇所の地点の地図上の位置に関する記述をお読みいただいて、既に気づかれた方々も多いと思うが、いずれの村でも、村の近くに川が流れているか、村が川に面しているか、あるいは川が村を通り抜けて流れているところばかりである。それには、こうした村が誕生した時の、次のような経緯があったのである。

*Pandy* ['pandɪ] という語は、pannu + ty から成る合成語であるが、動詞的名詞の pannu ['panɪ] には 'curo (defnydd) er mwyn ei lanhau a'i dewhau' *GPC* —洗って厚みを出すために(生地・布地)を打つこと— の意味があり、この語から転用される形容詞 pan は、'gair i ddisgrifio gwlan sydd wedi cael ei drin trwy ei wlychu, ei sychu a'i smwddio i wneud brethyn' *GG* —毛織物を作るために水に濡らし、乾かし、アイロンをかけるなどされる羊毛について述べる語— の説明が与えられる。要するに、生地を密にするために行う縮絨することであり、羊毛産業には欠かせない作業の一つである。この合成語の二番



目の要素 *tŷ* [ti] は「家」であり、動詞的名詞に結びつくときには [t] は [d] と「軟変異」が生じる。合成語全体の意味は、従って、日本語への直訳は「縮絨を行う家」であり、1)「縮絨小屋」 2)「縮絨場」 3)「縮絨工場」ということになる。ただ、カイルディーズ郊外サインファガン Sain Ffagan / St. Fagans にある「カムリ民俗博物館」Amgueddfa Werin Cymru / Museum of Welsh Life に展示されている「羊毛工場」Y Felin Wlân / Woollen Mill (1760年に建てられたポウイス州サンウルティードのエスガイル・マイル Esgair-mael, Llanwrtyd (22/8746), Powys から移転され、展示) のような「工場」を想像すると、3)「縮絨工場」の邦訳となるだろうが、カムリの国の片田舎に建てられた「共同利用」が目的の *pandy* には、1)「縮絨小屋」か、せいぜい2)「縮絨場」の訳が妥当だと思う。カムリにおける羊毛産業の歴史的発達との関連で「パンディ研究」Astudiaethau Pandy を試みるならば、訳語も1)「縮絨小屋」2)「縮絨場」3)「縮絨工場」と変化するかも知れない。Melville Ricahrds (1969:351) の説明は以下の通りである。

'The term used for fulling in Welsh is *pan*, a borrowing from Latin *pannus* 'cloth'. From this are derived the verb *pannu* 'to full cloth', *pannwr* 'a fuller', *pandy* 'a fulling mill' [from *pan* + *tŷ* 'house'], and *melin ban* 'a fulling mill'. It is impossible to say with any certainty how old this borrowing is, but it may be inferred that it probably dates back to the period of borrowing from Latin into British during the Roman occupation, particularly as it occurs in the cognate Breton *pañn*, Cornish *pan*.'

いずれにしても、上述の「カムリ民俗博物館」に展示されているエスガイル・マイルから移転された「羊毛工場」Y Felin Wlân / Woollen Mill のように、英国の産業革命の影響後のものとは異なり、

'Until nearly the end of the eighteenth century fulling mills, worked by **water power**, were the only machinery in general use, and their wide distribution is suggested by the frequency of the Welsh equivalent, *pandy*, as a place name. To these the weaver brought his cloth for fulling just as the farmer brought his corn to the grist mill for grinding.' (下線付きの太字体は水谷)

A.H. Dodd, 1972, *A Short History of Wales, Welsh Life and Custom, from prehistoric times to the present*, London: B.T. Batsford, p. 117.

と指摘されている。

同書には、二つのタイプの *pandy* の写真が挿入されていて (p. 117.)、最初

のものは「縮絨場」と呼ぶに相応しいケレディギオン州サンフラスティード村 Llanrhystud (22/5369)にあった 1835 年に建てられたものであり、小川のそばの畑の中に、ポツンと水車小屋だけが建っているものである。二つ目のものは、メイリオニーズ州ドルゲセ町の 'Ffatri Fach' 「小さい工場」と呼ばれる「羊毛工場」Woollen mill (p. 118.) で、エスガイル・マイルのものと同様の「縮絨工場」と呼べるものである（同書は、吉賀憲夫氏の邦訳があり、京都修学社から 2000 年に出版されてはいるが、残念ながらパンディの写真はない）。そして、

'... for most of the countryman's needs could be met by members of the local community itself. . . , farming depended almost entirely on the wide range of hand tools, . . . During this period of near economic self-sufficiency, craft workshops in all parts of Wales were numerous and important, . . . The processing crafts of Wales, where the craftsman was concerned with processing some raw material, usually demanded a range of immovable equipment and usually required water power. For this reason, the processing industries were more often than not Practised in small factories or mills in river valleys, often in isolated locations.'

(下線付きの太字体は水谷)  
J. Geraint Jenkins, 1975, *Welsh Crafts and Craftsmen*, Llandysul: Gomer, pp. 5-6.

との発言もある。さらに、カムリでの羊毛産業の発達の歴史における pandy の位置づけとして、「パンディ研究」の現地での第一人者の一人、このジェンキンズ博士は、次によようにも発言されている。

'But the most important technical innovation of all was the application of water power to the fulling process. In reality, the introduction of the fulling mill marked the first stage in the transition of the woollen industry from homestead to factory. While carding, spinning, and weaving continued to be domestic pursuits as in the past centuries, cloth could now be finished under the hammers of a water-driven fulling mill. Some indication of the spread of fulling mills may be obtained from the occurrence of the names *pandy* (fulling mill), or *pannwr* and *twcwr* (fuller).'

J. Geraint Jenkins (1969:101—下線付きの太字体は水谷)  
このような次第で、地名 *Pandy* は、カムリ全域にわたって分布し、しかもそれぞれの *pandy* が川のそばに位置して建設されていたのであった。豊かな自然に恵まれていたカムリの国の伝統的社会では、水利の必要上、多くの場合、水路が掘られて、川のそばに *pandy* が建てられ、村人たちの生活上の要求に

応えていたのであった。正に「自然と人工」の合作というカムリの国の伝統文化の極めて大切な特徴を示しているものと言えよう。しかしながら、英国の産業・農業革命に始まり、押し寄せる「近代化」の荒波には抗するすべもなく、pandy そのものは廃墟となったり、消滅してしまったというのが現実であった。そしてその後も、人里離れた田園の真ん中に、水路だけがさびしく残っていて、川沿いの田舎道を旅するわれわれの眼に、ふと、留まることも多々あるのが現状のようである。

**【次号に続く】**